

真武型妙見の変容

その他のタイトル	Transformation of Zhenwu type of Myoken
著者	二階堂 善弘
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	14
ページ	535-541
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00023037

真武型妙見の変容

二階堂 善 弘

Transformation of Zhenwu type of Myoken

NIKAIDO Yoshihiro

There are many types of Myoken statue in Japan. Including Boy type, Sonjouou type, Nose type, Zhenwu type and so on. Among them, the Zhenwu type was influenced by the god Xuantian Shangdi. The God Myoken was influenced by the God Xuantian Shangdi, probably during the Kamakura period. I investigated the Myoken statues in a place and found that Yasuhiro, Hoshida, Souma, Chichibu, Chiba and other Myoken belong to Zhenwu type Myoken.

Keywords: Zhenwu, Myoken, Taoism, Folk Religion

キーワード：真武、妙見、道教、民間信仰

一 様々な妙見像

妙見神^{みょうけん}は、日本の各地で信仰されている神である。仏教寺院でも祭祀され、その場合は妙見菩薩と呼ばれることもある。現在では、その知名度はやや下がっているものの、日本の各地には妙見山、妙見町、妙見通りなどの地名が残っており、また妙見神社、妙見宮、妙見堂など、妙見神を祀る施設は、いまでも至る所に存在する。

妙見を祀ることで知られている寺院や神社には、福島^{そうま}の相馬妙見、埼玉^{ちちぶ}の秩父妙見、群馬の高崎妙見、千葉の千葉妙見、大阪の能勢^{のせ}妙見、山口^{くだまつ}の下松妙見、福岡の足立妙見、熊本^{やつしろ}の八代妙見などがある。

しかしながら、これらの神社や寺院で祀る妙見の像は様々な形があり、まったくもって統一性に乏しい。これらの相違については、林温氏、植野加代子氏、平瀬直樹氏、丸井敬司氏、小村純江氏などが詳しく検討されている¹⁾。特にここでは、平瀬氏と小村氏の所論に基づいて、その像の類型について考えた

1) これについては、林温『妙見菩薩と星曼荼羅』（『日本の美術』377号・至文堂、1997年）、植野加代子『秦氏と妙見信仰』（岩田書院、2010年）、平瀬直樹『大内氏の領国支配と宗教』（塙書房、2017年）、丸井敬司『千葉氏と妙見信仰』（岩田書院、2013年）、小村純江『妙見信仰の民俗学的研究』（青娥書房、2020年）などを参照

い²⁾。

まず、三井寺（園城寺）に所蔵される図で有名な「尊星王型」がある。これは青龍に乗り、菩薩形で、四臂で手には日、月、筆、巻物を持つ。その像容は吉祥天に似ており、これと混同した像も多いという。

尊星王については、中国において種類の像が少ない。現在、中国の寺院でよく見られるヒンドゥー系の像には二十四諸天があり、梵天、帝釈天、鬼子母神、摩利支天などが含まれる。しかし、一般的に尊星王はこの二十四諸天のうちには含まれていない³⁾。

その例外に当たるのが、山西大同の善化寺にある二十四諸天である。この二十四諸天は金代のものとされる。そして尊星王の像が尊星天という名で含まれており、当時の貴重な像がいまも残されている。

しかしながら、善化寺の尊星天を見るに、その姿は帝王風の衣冠を着けた男性の像となっている。これが後世、この像が紫微大帝の姿と混同される原因であると考えるが、それにしても日本の尊星王の像とは似ても似つかぬものである。この善化寺の尊星天については、別個に発展した像容であると考えたい。

そして日本における尊星王型妙見は、主に奈良時代から平安初期までの像に見られる特色となっている。

妙見像の次の種類としては、童子形のものがある。すなわち、「童子型」妙見となる。かつて伊勢の妙見堂にあった像はその姿であり、髪はみずらを結っている。童子形の聖徳太子像によく似ており、混同しがちである。ただ、童子型妙見像の多くは、鎧を身に着けている。

これとは別に、能勢妙見で祀られるのが「能勢型」妙見である。座像が多く、鎧と兜を着け、頭の上に刀をかざす。やや大將軍の神像に似ている。日蓮宗寺院の妙見像は、この能勢型が多い。江戸時代に作られた像は、この能勢型が多いようである。

とはいえ、おそらく最も多く見られる像容は、「真武型」妙見であると考えられる。

真武型妙見は、玄天上帝、また真武大帝とも呼ばれる道教の神の姿をとる像である。玄天上帝は、披髪、すなわち髪を結っていないざんばら髪、手に七星剣を持ち足は裸足、亀と蛇、すなわち玄武に乗っているのがその像の特色である。ただ、日本の妙見の場合は裸足ではなく、靴を履いている場合がある。

明らかに道教の影響と見られる妙見は、この真武型妙見に限られるものであるが、一方では完全に日本の神と化している。そして、千葉妙見のように童子型と真武型が結びついた童子形の真武型妙見もあり、かなり複雑である。

2) 平瀬直樹「妙見の変貌」（前掲『大内氏の領国支配と宗教』）301-328頁、及び小村純江「妙見の像容」（前掲『妙見信仰の民俗学的研究』）83-93頁

3) 二十四諸天については、筆者「二十四諸天における仏道習合について」（『日本中国学会報』第71集、2019年）135-145頁参照

二 玄武から真武へ

真武型妙見を考えるに当たって、その源流となった真武について、その変容についても考える必要がある。

もともと、真武は人の形を取らず、亀と蛇の結びついた姿、すなわち玄武で表されるのが一般的であった。青龍・白虎・朱雀・玄武という四霊の組み合わせは、古代より変わらぬものとなっている。また日本にも影響を与えた。

このうち、青龍は後世では四海龍王として祭祀されるようになり、玄武は真武へと変化する。ただ、後世においても四霊は元の形でも祀られる。その場合は、青龍と四海龍王は別のものであり、また玄武は亀將軍、蛇將軍として、真武の配下の神と化している。



玄天上帝（マレーシア・ペナン島）

真武型妙見が亀と蛇を踏みしめた形で表されるのは、この真武の姿をそのまま受容しているからである。とはいえ、真武すなわち玄天上帝の形成はもっと複雑な背景を持つものである。これについて筆者は次のように述べた⁴⁾。

これらを総合的に考えるならば、真武、後の玄天上帝は二つの神が源流となって形成されたと思われる。一つは言うまでもなく亀蛇としての玄武、もう一つは北帝神である。北帝神の辟邪の性格、玄武の北方神としての性格、これらが真武という人格神に集約されている。また亀蛇としての玄武は、真武の源流となった一方で、人格神となった真武の部下として亀蛇二將という神に分化した。同様のことは北帝神にも言え、北帝神の高位神として北極を統べる機能は、紫微大帝に受け継がれ

4) 筆者『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部、2009年）50頁

たし、妖魔討伐の機能は真武へと引き継がれたのである。こちらでも分化が起こっている。一方で真武・玄天上帝では両者の結合が起こったのだ。つまりこれまでの「玄武（亀蛇）は真武の起源である」といった直線的な発展を考える見方は、単純に過ぎると言わねばならない。もっとも玄天上帝に限らず、一つの神の形成には、幾つかの複雑な要素が結合しているのが常である。

人格神としての真武が形成されるのは、おそらく五代、北宋以後のことである⁵⁾。当然ながら平安期の主な妙見が尊星王型であるのは、そもそもこの時期には真武自体が一般に知られる神ではなかったからである。北宋期には真武は北極四聖のひとつに過ぎず、天蓬元帥てんぼうげんすいなどのほうの知名度が高かった。また北極四聖のひとつ翊聖真君趙玄朗よくせいは、宋の皇室趙氏の祖先神とされたため、宋代には皇室より大きく優遇された。玄武が真武と改められたのも、その諱いみなを避けたためであるとされる。

その後、真武は将軍である北極四聖から抜けて地位が上がり、称号も玄天上帝となる。この段階であれば、日本にも影響を与えるほどの神格となったと考えてよい。玄天上帝の称号は、元代に与えられたものである。日本においては鎌倉時代以降であれば、すでに位の高くなった真武が影響を与えていても不自然には感じない。おそらく真武型妙見の定着は鎌倉時代以降であることが推察できる。

三 鎮宅靈符神の影響

真武型妙見については、もうひとつ別の神格との混同がある。それは鎮宅靈符神である。

鎮宅靈符神は、家内安全のために家の壁などに貼られる靈符の中心に描かれる神である。この鎮宅靈符の多くは玄天上帝の靈符であり、中心には玄天上帝が描かれている。しかし、日本では玄天上帝の称号は知られておらず、「鎮宅靈符の神」と呼ばれてしまっている。すなわち玄天上帝は、日本においては、ある場合は真武型妙見と呼ばれ、ある場合は鎮宅靈符神と呼ばれているわけである。これにより、妙見神と鎮宅靈符神の混同も起こるわけである。

とはいえ、すべての鎮宅靈符神が玄天上帝であるわけでもない。大阪天王寺の堀越神社の境内にある鎮宅靈符の神は、西王母である。また、群馬高崎の達磨寺の靈符堂の神像は、玄天上帝に似ているものの、やや異なる姿をとる。すなわち、鎮宅靈符神がそのまま玄天上帝であるというわけではない。

鎮宅靈符神を祀る寺院や神社は、妙見ほど多くはないが、各地に存在している。先に挙げた群馬達磨寺の靈符堂、京都の閑臥庵かんがあんが、黄檗宗にて鎮宅靈符神を祀る寺院である。奈良には鎮宅靈符神社がある。京都の行願寺にも鎮宅靈符堂がある。大阪天満宮の境内にも、鎮宅靈符社が存在している。これは江戸期に勧請されたものである。

5) 前掲筆者『明清期における武神と神仙の発展』43-46頁



鎮宅靈符神（達磨寺靈符）

また妙見神を祀る神社では鎮宅靈符を配布している所も多く、たとえば星田妙見では鎮宅靈符を配布している。当然ながら、妙見神と鎮宅靈符神の双方を祭祀する場所もある。

鎮宅靈符神に関する専論は少ない。その少ない専論のひとつである山極哲平氏の論により、その起源について見てみたい⁶⁾。

鎮宅靈符神の誕生は、おそらく中世日本であったろう。中国の文献には「鎮宅靈符神」という語は見えず、道蔵『太上秘法鎮宅靈符』でも鎮宅靈符と真武とは結び付けられていない。靈符はあくまでひとつの呪術であり、人格を有する神ではない。他方、日本においては楠木正成の神鏡に「鎮宅之靈符」という語が記されていた。「鎮宅之」は「靈符」の連体修飾語であり、固有名詞としての「鎮宅靈符神」ではないものの、神鏡の裏には後世一般的となる三尊形式の尊図が鑄られており、これを「鎮宅靈符神」の萌芽と見ることはそう間違いではなかろう。

鎮宅靈符神もまた、その起源と変容が非常に掴みにくい所がある。そもそも、玄天上帝の像を誤解して、これに「鎮宅靈符神」という名称が付けられたものであると考えられる。ただそれがどの時期に行われたのかを判定するのは難しい。山極氏の検討によれば中世期であるとする。やはり妙見神と同様に鎌倉期以降に発展したものと考えたい。

またここで問題になるのは、三井寺における妙見神と鎮宅靈符神の関連である。三井寺（園城寺）にある妙見像は、先にふれたように尊星王型妙見が多い。一方で図像には、鎮宅靈符神があるが、これは完全に玄天上帝の姿をしている。あるいは、三井寺においては、妙見神と鎮宅靈符神の古い形が保存されているとも考えられる。ただ、これについてはまだ不明な点が多く、今後考察を続けたい。

6) 山極哲平『鎮宅靈符神の誕生と展開』（関西大学大学院文学研究科修士論文、2009年）45頁

四 真武型妙見の所在

先に書いたように、妙見神は全国の至る所で祀られている。そのなかでの真武型妙見の祭祀の所在について考えてみたい。

難しいのは、その神社や寺院に祀られている像と、お札などに描かれる像が異なる場合もあるということである。たとえば神像は能勢型であるのに、お札には真武型が描かれているなどという所も多く、截然とした区別をするのは不可能である。また現在では神社の多くが本尊を妙見ではなく、天之御中主神に変えてしまっている。そもそも神像を飾るのはむしろ少数であると考えられる。

ここでは、筆者が目撃しえた範囲での真武型妙見について見てみたい。

九州では、八代妙見、すなわち八代神社が妙見信仰の中心であるが、祭神は天之御中主神、国常立尊となっている。とはいえ、ここは本来真武型妙見を祀るものであったことは、その祭りからわかる。祭りの規模は九州でも有数のものであるが、そこでは「ガメ」と呼ばれる巨大な亀蛇を神輿のように担いで回っている。すなわち真武の足に踏む亀蛇である。また、琳聖太子の伝説も見られる。八代妙見は、真武型妙見に類すると考えてよい。

山口の下松妙見は、妙見宮鷺頭寺と降松神社とに分かれている。さらに金輪神社も妙見に関連する神社である。降松神社の本尊は天之御中主神である。ただこれらの妙見には、琳聖太子伝説が同じように伝えられている。こちらも、真武型妙見の祭祀に関連するものと考えられる。

大阪の星田妙見も本尊は天之御中主神である。ただ、鎮宅霊符や三宝荒神などを同時に祀り、習合の度合いが大きい。かつ、その鎮宅霊符に描く神は、まさに玄天上帝の姿そのものである。

能勢妙見も、その姿はいわゆる能勢型妙見が主流であるが、実際には鎮宅霊符神として真武型妙見を祭祀する。とはいえ、日蓮宗系寺院に所蔵する像の多くは能勢型妙見である。これらは真武型妙見には属さないと考えるべきであろう。

福島には相馬妙見がある。相馬妙見歓喜寺、相馬神社、妙見中村神社などを総称して言う。相馬神社の主神も天之御中主神である。ただ、歓喜寺の主尊を見るに、亀蛇に乗り、剣を前にかまえ、披髪である真武型妙見の姿をとっている。こちらも、真武型妙見と考えると問題ないと思う。

埼玉の秩父妙見は、廣見寺、秩父神社などを含み、地区一帯に広がる信仰となっている。妙見七つ井戸という、北斗七星を象徴する井戸も点在している。地区では、現在も秩父夜祭が行われている。そしてこの地域の妙見も、複雑な性格を持っている。妙見神はそもそも女性神とされ、その姿もやや異なる。

とはいえ、廣見寺の妙見像は明らかに真武型妙見であり、また秩父神社のお札に描かれる像も、完全に真武型である。古い層の妙見を残すとはいえ、秩父妙見が全体として真武型妙見に属するのは間違いないと考える。

千葉妙見については、真武型妙見の年代を考えるのに非常に重要なものであると考える。千葉妙見は、千葉神社を中心とするものである。この地域では、妙見大祭が毎年行われている。この地を支配した千葉氏が妙見神を信仰したことも、よく知られている。

千葉にある妙見像については、丸井敬司氏に詳しい論考がある⁷⁾。丸井氏は亀蛇に乗る妙見像を「水天」型とみなし、真武型とは別系統のものであると論ずる。山王の影響があるともする。

これは難しいところで、真武型のもうひとつの特徴としては、亀蛇に乗ること以外に、披髪、すなわちざんばら髪であることがある。時に妙見像がみずら髪になることは、この反映であると考えられる。披髪で亀蛇に乗る水天も、これは実は真武型水天と称すべきであり、やはり真武の影響を受けたものと考えられる。水天と真武はともに水神であり、その点が混同の要因となっていると考える。ただ、この点についても経緯は複雑であると思われるので、別に論じたい。

千葉妙見のなかで、特に古い層に属するとされる像が二体ある。ひとつは銚子の堀内神社に蔵されていたもので、建武二年（1335年）の銘がある。もうひとつは東庄町の所蔵になるもので、東庄妙見と称されている。いずれもレプリカ像が千葉市立郷土博物館に展示されている。



堀内神社蔵妙見（レプリカ・千葉市郷土博物館）



東庄町蔵妙見（レプリカ・千葉市郷土博物館）

これらの像容を見るに、いずれも真武型妙見と称してよい。そもそも玄天上帝の姿からして、甲冑を着けたものと、着けていないものがある。そして、亀蛇に乗っているのがその証左である。一方で、一般的な玄天上帝像と異なるところは、靴を履いているところである。通常では玄天上帝の像は裸足であり、靴を履いていない。とはいえ、甲冑姿の玄天上帝像には、靴を履いているものもあるので、これも確実に妙見のみの特色とは言いがたい。

ただ、これらの像の年代を考えるに、鎌倉期後期には確実に妙見が玄天上帝の影響を受けていることは看守できると思われる。

今後とも、各地の妙見像について調査し、真武型妙見の分布と、玄天上帝の影響について考えてみたい。

7) 前掲丸井敬司『千葉氏と妙見信仰』181-216頁

